



Title	「も」の文法的特性と語用的機能に関する研究 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	稲吉, 真子
Citation	北海道大学. 博士(文学) 甲第13836号
Issue Date	2020-03-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/78691
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Mako_Inayoshi_review.pdf (審査の要旨)



[Instructions for use](#)

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 稲吉 真子

主査 教授 加藤 重 広
審査委員 副査 教授 野村 益 寛
副査 准教授 野本 東 生

学位論文題名

「も」の文法的特性と語用的機能に関する研究

本論文は、日本語の助詞「も」について、形態論・統語論・意味論・語用論など諸領域の先行研究を踏まえ、横断的かつ多角的に検証し、網羅的に分析することによって、その特性を全体的に明らかにした研究として評価できる。

・当該研究領域における本論文の研究成果

本論文の第Ⅰ部では、論文構成と研究意義や目的に言及した後、先行研究の整理と確認、また、後章の分析に必要な用語や概念の確認を行っている。先行研究の検討においては近世以降、近代の主要な文法論における位置づけを手堅く確認しており、その中で「累加」とする従来の捉え方では説明力に不足があることを指摘している。

第Ⅱ部は、4つの章で構成され、まず、統語形態論的な観察と記述を行っている。そこでは、名詞句に後接する場合、強制的に削除されるのは格助詞「が」のみで、「を」「に」の任意の中間域、格助詞が残存する類いに分けることができ、その点で「は」とは類似するが多少の差異があること、動詞・形容詞類の連用形につく点で他の副助詞と共通性があること、「誰もが」の「も」など他の用法とふるまいの異なるものがあることを指摘している。第5章では、従来の「累加」という捉え方を「同一範疇判断」とすることで説明力が高まることを指摘し、この判断には意味的・語用的の二分が可能だとした。第6章では数量詞につく「も」を論じ、不定語につく「も」との共通性を踏まえながら、尺度性を想定することが可能だとしている。また、肯定で数量詞につく「も」は多寡評価を表す点で「しか（…ない）」と対称性をなし、否定では境界値を示す点で「は」と対称性をなすことを確認している。また、「一人も」のように1+数量詞につく「も」が否定極性項目として機能することも指摘している。第7章は、学会誌に査読を経て掲載された論文をもとにしており、命題全体について同一範疇判断を示していると考えられる「も」が左方に移動する現象を否定辞繰り上げに準えて一種の「繰り上げ」と捉え、事実の観察と分析を行う。「も」の繰り上げは、標示を早めて聴者の解釈時間を増大させ、述部に繰り込むより名詞句への後接で形態論的操作が単純化されるなどメリットがある一方、形式と意味との支配域のずれや解釈の多義化などデメリットもあるが、文脈的な解釈誘導や談話効果によって相対的に繰り上げが日本語では選好されると主張する。この分析は、もっと掘り下げるべき点があるが、相応の独自性もあり、一定の説明力を持つ成果であると評価できる。

第Ⅲ部は3つの章で構成され、主に語用論的な分析を行っている。第8章では従来ほぼ逆接条件節あるいは譲歩節と扱われていた「～ても」が、過去テンス化できない点で節（clause）ではなく句（phrase）と分析すべきこと、「～ても」句が後続の帰結部（主節）の成立を左右しない無効力性に同一範疇性が作用することを明らかにした点は、重要な業績であり、今後の条件帰結関係や因果関係の構文分析を発展させるよすがとなることが期待される。第9章では「は」では多焦点文が可能であるのに、「も」では成立しにくい理由を解釈コストの増大という認知処理負荷の観点から説明している点も重要な貢献と評価できる。また、照応の観点から「も」を分析記述した研究としては

先端的であり、前方照応と相互照応以外に、無照応を設定し、形式上の照応がなく、文脈上の照応も読み込みにくい用法では疑似的な照応として談話効果が前景化するとしている。これは、従来の不定他者の用法についての新たな説明で、やや論証の余地を残すものの、研究の新しい局面を切り開いた点は重要である。第 10 章では「も」がヘッジとして判断を緩和するネガティブポライトネスと分析できるほかに、「も」を用いることで近接化を図り、共感形成に寄与するポジティブポライトネスと分析できる用法があることを指摘している。

「も」に関する言語学的研究は従前も数多くあったが、本論文はその網羅性と多角性において群を抜いている。また、主にネオグライス系語用論と社会語用論の新しい成果を文法論に融合させている点で、新しい研究の方向性を示している。加えて、上述の通り、同一範疇判断という機能を設定することで、無照応の不定他者用法や逆接条件の譲歩用法なども統一的に説明しており、ポライトネスに関わるコミュニケーション上の機能を明らかにするなどいくつかの重要な貢献がある。もちろん、その一方で、「も」以外の助詞類との体系的整合性や他品詞の扱いに十分な注意が払われていない点、更に掘り下げることの可能な論点が残っている点など、精緻化の余地がまだある。しかし、それらも全体的な貢献と商量するに重大な瑕疵とは言えない。

・学位授与に関する委員会の所見

以上の研究成果に関する評価を踏まえ、審査委員会として全会一致で、稲吉真子氏に博士（文学）の学位を授与するのが適当であるとの結論を得たものである。